

七 終 戦

昭和二十年八月十七日、いよいよ将校斥候出発の前日となった。

身仕度、携行品も揃え、出発準備は総て整った。

思えばこの、祖国から遠く離れて名さえ知らなかったソロモンのブーゲンビル島に骨を埋める事になるかも知れないが、今となっては寧ろ働き甲斐のある華々しい最後じゃないか、祖国の為に喜んで死のうと云う心構えも自然に出来上がっていた。

朝食後、一中隊から来た山崎軍曹を海軍側将校斥候隊長との最終打ち合わせに派遣した。

一時間経って山崎軍曹は怪訝な顔をして帰って来た。

「小林少尉殿、海軍側は出発中止になったそうです。理由を聞いたのですが何故かはっきりとはしません。只海軍側部隊長から中止命令を受けたとしか言つて呉れません。が、しかし海軍では妙な噂が出ていました。それは——」と言ひ淀んだ。更に問い詰めて聞いたところ終戦の噂が飛び交っているらしい。

一瞬、何の感慨もなかった。放心していたのかも知れない。

海軍は無電設備が稼動しているし、ここ数日敵機の銃爆撃も無いことから 事実には違いないと直感した。我にかえって、すぐさま大隊長の宿舎に急いだ。

「ム——。海軍でそう言っておったか。陸軍には連絡が遅く、俺もたった今、部隊長から聞いたばかりだ。何れにしても明日全将校集合の命令が出ているから、それまでは進退出来ぬ。出発は中止だろうが明日まで兵には黙っておれ」

八月十八日、ジャングルの梢だけを残して裾の小さな木や草を刈り取った、薄暗いが、かなり広い部隊本部前広場に部隊の全将校が不安気な面持ちで整列した。やがて部隊長の道下少将は、

深い感慨を胸に秘めた眼を全員に走らせた後おもむろに状況を説明しはじめた。

「――、しかしながら今後如何に対処するかは、よくよく考えなければならぬ。軍人として、あえて敗戦の汚名に耐えるか、潔く全軍一丸となって敵地に切り込み玉砕するか、別命するまで自重せよ」

話の終わりの方は声が涙に打ち震えて聴き取り難かったが、とにかく、戦争が終わり、我々が斥候に出なくてもよいようになった事は事実だった。それも、今日の今日、出発と言う日に出発中止になるとは何と言う恐い運命だろう。もう二三日遅かったら我々は、呼び戻しも出来ずに、ジャングルの奥深くどうなっていたか判らない。

将校斥候の要員は直ちに解散となり、私は再び大隊本部将校室に戻った。

部隊長の説明は、副官から大隊本部全員に伝えられたが、兵達は、直ぐには大きな感動を表さなかった。兵も亦、あまりの変化に惚けてしまったのであろう。

その後部隊長の別命は無く、切り込みをする気配もない。

日が経つにつれて次第に内地の夢が現（うつつ）に感じはじめて来るようになった。骨と皮になった兵達も、その目には生気が蘇ってくるようだった。

しかし、将校の一部は部隊を離れて海岸へ行き、南海の真っ白な砂浜に正座して遙か北、故国の方を伏し拝み、拳銃を頭に当て自決したという噂を耳にした。嗚呼。

戦争は終わったが、暫くの間は豪州軍との接触はなく、今迄通り食物を求めての生活が続き、部隊の秩序も今迄通り良く保たれていた。しかし、兵の衰弱は局限に達しており、大隊本部でもその約三分の一位の兵員が動く事も出来ず、ジャングルの中の薄暗い病室で、潰瘍の膿で汚れて固くなった毛布にくるまり終日物もいわずに、虚ろな眼で天井のニッパ椰子の葉を見つめている有様である。食も取らなくなった兵に戦友が、「おい、戦争は終わったんだぞ、もう直ぐ日本へ帰れるんだぞ――おい、死ぬなよ！」励ます戦友の方が頬に涙を垂らしているが、病人は天井を

見つめたまま何の表情もない。そして、次々と息を引き取っていった。貝柱を取る特技を持った元氣そのものに見えた木谷伍長が呆気なく死んでしまった。そしてあの純情な森本一等兵もこの時期に死んだ。マラリヤを発病した為に陸路調査について行く事が出来ず、病床から悔しそうに私を見つめていた瞳がわすれられない。

今まで持ち堪えてきた生命の灯が、敗戦と同時に一斉に吹き消された様な悲しい状態だった。

この頃約十名の兵が病死したが一人づつ埋葬する事も出来ない。大隊本部から少し離れた密林の中に三メートル四方位の深い穴を掘り遺体は其処に次々と埋められた。一人の兵が死ぬと遺体を穴の底に寝かせて日頃使用していた毛布を掛け、その上へ付近に野生している野草をばらばらと覆いかける。又一人死ぬと、更にその上に横たえる。

入隊前僧だった兵が、彼も亦半病人だが、型ばかりの読経をし、残った者達が合掌する。戦争が終わったのだから生命さえあれば夢に見た故国に帰れるものを、と云う思いを胸に秘めて無言で手を合わせている。ジャングルの中の名も知らぬ鳥ばかりがけたたましく鳴きさけんでおり、鬼哭啾々たる情景だった。

無傷でソロモンに上陸した大隊本部だったが、既に半数近くを失った。

やがて、漸く豪州軍が現れ、捕虜として収容する為に次々と指示が届けられるようになった。先ず武器の放棄である。銃・剣・弾薬など全て定められた地点に集積、豪州軍に運び去られて海に放擲された。長い間私の腰に重かった、そしてその錆の故に常に私を悩ました水田国重もソロモンの海に消え去った。殆どの武器は放棄されたが、私は密かに少数の小銃をジャングルに隠しておいた。あまりの恥かし目を受けた場合を考慮して違命秘匿したのであるが、豪州軍が検査に来ると言う噂を聞き再び隠し場所から取り出して近くの河に沈めた。ところが河底が浅く真鍮の銃弾が光って見えるので暫くの間は気にかかっていた。

次に部隊の移動命令が出た。何時の場合でも部隊の移動は大変で、既に食糧が全く枯渇して、

ジャングルのあちこちの小さな土民の畠跡から収穫する僅かな芋で命を繋いでいる現状での移動は大きな犠牲を覚悟しなければならない。移動命令の内容は生活にどうしても必要な物だけを持って海岸に集合する事であった。もとより兵にさしたる持ち物はないが、命令が出るや否や畠を掘り起こして小指程の小さな芋まで大事に抱えて出発した。豪州軍は將校に対してはかなり寛大な態度を採ったが、恐らくは膨大な数の捕虜対策として日本軍の秩序を温存し、將校により部隊の統率を採らしめようと図ったのである。その故か、將校は移動に際して持ち物に制限を加えられなかったで、それぞれ將校行李を携行した。海岸までかなりの距離があった。兵達は交代で行李を運搬して呉れ、有り難かった。平素憎まれていた將校に対しては兵達は進んでその行李の運搬を手伝おうとした。戦争も終わり、怨み辛みも水に流して皆心が和んで来たのも当然だろうと思っていたら、あに計らんや兵達には別の意図があったのである。海岸までの間には、幾つかの河を徒河しなければならぬが、その際に故意に行李を河中に浸して中味を傷めておき海岸に着く頃には外見はすっかり乾いて判らない。「有り難う」と礼を言って貰ってほくそ笑む魂胆だったのである。評判の悪い第三中隊長の行李の中に隠されていた筈の戦死者達の腕時計は恐らく全て廃品になってしまった事であろう。しかし考えてみれば、戦争を終えて本来身分差の無くなった時期にしては、実に茶目っ気のある反乱に過ぎなかったと思ひ出される。

海岸に集結して初めて豪州兵の顔を見たが、毛むじゅらの大男が多く、彼等が我々の携行品の中に剣や拳銃などの武器がないかと鋭い目で見つめているので不気味であった。その監視の中でやがて舟艇に詰め込まれブーゲンビル島を離れ、間もなくフアール島に移されたのである。

フアール島はショートランド島と共にブーゲンビル島の東北に並んだ殆ど無人の小島である。第八方面軍関係の捕虜約十万人がこの島に収容されたが、この内ブーゲンビル島の生き残り將兵は僅か一万三千人であった。

上陸と同時に捕虜の認識番号が刻印されたメタルが支給され首にぶら下げさせられたが、私の

番号はJA281220であった。

上陸しての最初の仕事は収容所建設である。十万の将兵は約一万づつ十ヶ処に分けられたが、言わば約一万人の部落作りをするのである。連日臺州軍から与えられた資材で、これから何時迄過ぐすのか判らないまま宿舎作りの作業が続いた。我々将校も真上から照りつける太陽の下、裸で作業に励んだ。此処では、既に軍隊の組織は解体され、将校は一ヶ処に集められていた。食料はもう自給する必要がなくなり、臺州軍からオートミルやビスケットが支給された。ただ、その量が極めて少なく、ひどい時は一日にビスケットが七枚という日もあり、悲鳴をあげた。戦争中食料らしい物にありつけなかったが、そのかわり朝から晩まで犬のように何でも口にほり込む癖が付いていたので、栄養はあるかも知れないが、ひもじさに耐えられなかった。

収容所建設が一段落すると、兵は毎日早朝から作業に出されたらしいが、どんな作業をしたか知らない。そして臺州兵の中には質の悪い兵もいて、日本兵の金歯を抜き取るような粗暴な行爲をすると云う噂も流れてきた。

只、そのような粗暴な兵は極く一部の者であって、私が接した多くの臺州兵は、一般的に素朴であつたように思う。皆早く帰国したいらしく、よく故郷の話をしていたが、ある兵は「臺州の港に着いてからでも、内陸にある我が家まで二十日以上かかるので、今から帰ってもクリスマスまで故郷で迎える事は出来ない」と嘆いているのを聞いて、オーストラリア大陸の大きさに感心した事がある。又教育程度も低く、或る時臺州兵が整列し、指揮者が「番号」と号令しても、二十人目位になるとしどろもどろになってくるのには驚いた。

どの兵も個人としては無邪気なほど素朴であり、どちらかと云うと日本人を畏敬している様な雰囲気接して来る者が多かった。

時には、これが互いに憎み合い、殺し合つた敵なのかと不思議に思うことすらあつた。軍隊対軍隊となれば、個人の人間性は吹き飛んでしまう戦争を呪つた。

日本兵は日々労役に従事しているが、将校は捕虜に関する国際規約によって作業を免じられ、待遇は悪くなかったが、四季の変化も無い小島で何時帰国出来るのか判らないまま 日々為す事も無く過ごすのも気が狂う程つらいものである。今迄部隊が異なり全然面識の無い将校達と同室したが、その中に一人だけ出身の同じ第百六連隊の顔見知りの将校がいた。仏教大学を出た非常に朗らかな男で、戦争中ずっとブーゲンビル島近くの小島にいて、監視任務に着いたままだったらしい。従って戦闘には全く無縁の上、食料も着任時に豊富に持ち込み備蓄していたし、その上あまりに小さな無人島だったのでマラリヤ蚊が生息せず全然病気に罹らなかつた幸運児である。生来陽気な男であるので、別の宿舎にいた第百六連隊出身の友人達が伝え聞いて尋ねて来て、久し振りの会合を喜び合っていたが、その時の彼の大きな笑声が今でも私の耳底に残っている。その彼が突然死んだ。今迄マラリヤに罹った事が無く、抵抗力の無い彼はフアール島に来て、初めて悪性マラリヤに罹りあつてなく死んでしまったのである。故国と便りも途絶したまま三年や々と戦が終わった時点で病死した哀れな戦友、国の父母が聞いたら嘆き悲しむことだろう。毎日が退屈そのものだった。日なが雑談にふけり、体を動かすことといえは収容所のまわりをぶらぶら散歩するだけであった。中には釣道具を手作りして魚を取る者もいた。医務室の軍医は器用な男で一日中海岸に出て鳥賊を釣っていた。話好きの六師団出の男がいて、何処で知識を得てきたのか中々博学であった。彼はフィリッピンから中支に転戦し、ガダルカナルで九死に一生を得、ブーゲンビル島に来て生き残ったという死神に見放された様な男であるが、終戦後一早く頭髪を伸ばし始め、今ではかなりふさふさとした髪になっている。その髪を掻き分けながら参加してきた各戦闘の話から敗戦の動機となった原子爆弾の説明に及ぶのであった。特に今度の戦争で米国に敗れたのは科学力の差だという彼の話には大きな衝撃を受けた。原子爆弾然り、電波探知機しかり、そして何よりも暗号解読力の差が決定的だったと云う。戦前の日・米交渉に於ける日本側の指令が総て解読されており、開戦後も殆どの作戦が筒抜けになっていたらしいと云う。

これでは如何に日本軍將兵が優れていても勝てる筈が無い。彼の話を聞いていると敗戦の悔しさがよみがえり、戦死した多くの將兵のあわれさに心が痛むのだった。また彼は、戦争中に於ける高級將校の悪業を暴き挙げて飽くことを知らなかった。そして、今この島に居るそれら高級將校を呼び出して我々で自主的に軍法会議を行うべきだと主張する。事実、そういう風潮は他の宿舎にもあつたらしく、或る宿舎では旧悪を暴露された大隊長が、血氣盛んな若い將校連中に呼び出され土下座して謝らされたという話を聞いた。

その中、豪州軍による戦争犯罪容疑者の摘発・調査が実施されると言う情報が流れ、身に覚えの有る者も無い者も戦線競々とした日が続いた。とにかく戦争に負けた経験の無い日本人には、勝者である敵国からどういう報復を受けるか判らぬと言う不安が何ともいえぬ恐怖を抱かせた。

ある日將校全員が一人づつ適当な間隔をおいて砂浜の上に整列させられた。酷熱の太陽が容赦なく照りつける中を何時間も立っているのは非常な苦痛だった。目も眩んで朦朧としてきた頃、突然我々の収容所の前の海岸沖に飛行艇が着水し、豪州国旗を掲げたランチが護衛兵に護られた。豪州軍將校と土民を運んできた。そして一言も説明の無いままに豪州軍將校に誘導された土民が我々の顔を一人づつ覗き込んでいった。あちこちで土民に指さされた者が着剣した豪州軍護衛兵に引き立てられて、やがて飛行艇でいずこともしれず連れ去られた。解散して宿舎に帰る我々は惨めさと疲れでも言う者もなかった。

戦犯調査は数回あったが、我々が居たショートランド島に於ける戦争犯罪人の摘発が行われるという噂が流れて来た。聞けば我々南海守備隊が上陸する以前は第六師団が守備をしていたが、その六師団の上陸時に、未だ残留していた英国將兵数名を捕虜として扱わずに虐殺したらしく、虐殺現場を目撃した土民を連れて来るという事である。従って私等南海第四守備隊とは無関係であるが、その土民が何年も前の事件の日本人の顔を、正確に記憶し識別出来るかどうかという不安が大きかった。我々日本人が外国人の顔を識別し難いように、土民も亦日本人の顔を識別し難い

のではなからうか。若し人間違いをされると大変なことである。或いは守備隊員から叱られた者が怨みを持って故意に名指しをする場合も考えられる。何れにしても、一度戦犯扱いをされると勝者の裁判は必ずしも厳正公平なものとは言い難く、命に関わる問題である。整列している我々の前を通過して行く土民と出来るだけ視線が合わぬように気を使ったものである。

戦犯調査もほぼ一段落し、再び単調な日々が続いた。もう新しい話題も種切れとなり、話題は専ら日本への帰還についてあれこれ推測することに絞られていた。正式の情報は入らなかったが国外で敗戦を迎えた膨大な数の軍人を帰還させる船が極めて少ない為、帰還出来るのは二三年後になるだろうと言う悲観論が専らだった。一日でも早く帰りたいという切実な願いにたいして、二三年という年月は耐え得られぬ長さであり、胸を掻きむしられる思いだった。

コバルトブルーの海、珊瑚礁の真っ白な砂浜と椰子の木、夜ともなれば満天の星空にひとときわかる輝く南十字星、風景はこよなく美しいが日々何の変化も無い島に閉じ込められ、徒に望郷の思いにのみ悩みながら単調そのものの生活がつづいて行く。

その中、私は自分の身体の変調に気がついた。

立っていても座っていても背中がだるく、痛むわけではないが、息苦しい思いだった。雑談を交わすのにも座っているのが辛く、手枕で話す日が多くなっていた。ある日例の釣好きの軍医に診てもらった。容体を聞いて軍医は、先にゴムの付いた棒で背骨を上から順番にコツコツと打診し、首を傾げた。

「いかな、レントゲンが無いので断定は出来んが、背髄カリエスの疑いがある。体も大分衰弱している様だから、今日から入院して絶対安静にし用便以外は寝ていること、辛い事だが日本へ帰って精密検査を受けるまでは大事をとった方がよい」と言いながら私の顔を覗きこみ、気の毒そうな顔をした。

思えば十七年二月入隊以来三年半以上、身も心も苛みつづけて来て一日と雖もゆっくりとした日

は無かったが、終戦になってから今度は身動きも許されぬ絶対安静の病に侵された我が身の不幸を嘆いたものである。数ヶ月間は文字どおり絶対安静を守り食事も寝たままでも取る有様だった。

収容所生活以来、退屈には慣れているとはいふものの、どうにもならない退屈さであった。

やがて見舞いに来てくれた戦友が何処で手に入れたのか知らないが、宗教に関する数冊の本を持ってきて呉れ非常に嬉しかった。敗戦そして思わぬ病氣に取りつかれ、よしんば不治の病と言われる背髄カリエスでなかったとしても、帰還後の人生をどう生きて行くべきか、色々と心が動揺している時に読んだこの本は、難解ではあったが心打つものがあり、貪り読んだものである。

また別の見舞いに来て呉れた戦友は学生時代に和歌を趣味にしていた男で、退屈しのぎに和歌を作る事を勧めてくれた。もとより時間はたっぷりとあり、天井をにらみながら思い付くままに書き留め、その戦友が来る度に批評してもらった。日頃故郷のことばかり思い浮かべているので故国のこと、肉親のこと等に関するものが多かったのはやむをえない。次の歌がある。

「老母を、芝居見に連れん、老父と、酒汲まんかな、その日近づく」

戦前父母にそんな事をした覚えは無い。どれだけ父母は嬉しそうな顔をしてくれるだろうか、私が今一番したいと切望しているのはこんな世俗の親孝行であり、その願望を歌にしたのである。また、死から蘇った今、もうそれは夢だと決めていた事が出来る日が一日一日と近づいている事を心を震わせて喜んだ歌でもあった。

その頃故国でも、何十万の親や妻が生死も判らぬ我が子我が夫の帰りを待って、毎夜、ラジオの帰還者ニュースを聞き洩らすまいとしていた。中には既に帰らぬ身となっている事を知りながらも、もしや何かの間違ひでは無かろうかと言う思いで何年も帰還船の着く桟橋に通いつめた母もあったそうである。

とにかく帰り度かった。一日千秋の思いとはあの時期の気持ちの事であろう。

フアール島に第一回目の帰還船氷川丸が着いたのは、二十一年の二月八日であった。帰還者数

が多いので全員が帰還出来るまでには、今後何ヶ月もかかるだろう。早い機会に帰還出来る事をひたすら願っていた所、傷病兵から先に帰る事になり、私も第一回目の帰還船に乗船する事となった。

ふらつく足でデッキを登り甲板に上がると、出迎えの船員達が口々に「御苦労さまでした」と言う。その顔を見、その声を聞くだけで涙が止めなく溢れる。船員の一人がそっと煙草を一本呉れたが、煙を吸いこんだ途端、少年の日いたずらで吸った時のようにくらくらと眩暈がしてその場に蹲ってしまった。

氷川丸の船倉は傷病兵で充滿しているがその多さに驚いた。どの顔もこれがあの激戦を戦ってきた勇士とは思われぬ哀れな表情をしている。もう半年でも帰還が遅れていたら恐らくその半数は帰れぬ身となったに違い無い。

私も乗船と同時に行われた身体検査で体重を計量したところ、内地での見習士官当時七十キロあったものが、四十数キロになっているのに驚いた。

十人程の看護婦が現れて船倉の中央に整列し挨拶をした。傷病兵達は静かになって彼女等の顔を食い入るように見つめ、彼女等の声に聞き入った。

「長い間、本当にご苦労様でした。もう十日程したら懐かしい故国に帰れます。それまで充分に休養を取り、元氣一杯に日本の土を踏んで下さい。——今から皆で踊りをお見せしますので、しばらくお楽しみ下さいね」

「赤いリングに、くちびる寄せて、

黙って見ている、青い空、

リングは何んにも、言わないけれど、

リングの気持ちには、よく判る。

リング可愛いや、可愛いやリング。」

その頃日本で流行していた歌を唄い、踊ってくれた。

其処、此処に兵の嗚咽する声が聞こえた。

貨客船の氷川丸は船足が遅い、それでも日一日と故国に近づいて行く。

同じ航路ではあるが二年半前の往路では、海を圧する艦隊にあってた勇姿が、帰路の船上では船員の挨拶に涙ぐみ、看護婦の歌声に泣く哀れな若者達の姿となっていた。

二月十八日朝、日本の山が見えると云う声が船倉に伝わってきた。

私は禁を破って甲板に出た。

浦賀港に入港予定の氷川丸はもう日本の近く迄来ていた。

見える。日本の山々が見える。やっと見えた故国は煙っていた。南の島々の様に青く明るくは無い。恰も竈の中を覗いているような、茶色く燻っているような色だった。しかし、その色には心安らぐものがある。

富士山が見える。まるで地上から浮き上がってしまったように大空に高く聳え、全山真っ白である。

じっと食い入るように見入っているうちに、やがて靈峰富士の天上高く、祖国に殉じた戦友達の姿を見た。

あの、進級を喜んでいた森本一等兵、西南台ロビーの人気者だった山田上等兵、婦人公論を読めと便りに書いた笠谷上等兵、ジャングルに消えて行った魚住兵長、山本少尉、木谷伍長、小栗中尉、林少尉、私に秘蔵の小刀を呉れた桜井少尉

皆、誇らし気ではあるが、しかし寂し気な、顔、顔。